都道府県別賞一等

寄り添う

静岡県　富士宮市立上野中学校　三学年

石井　侃

僕の将来の夢は僧侶だ。今は一生懸命修行をしている。辞書を引いてみると、僧侶とは「出家して仏教の教えを学び、修行しながらその教えを広める人」と書いてある。しかし、僧侶は修行し布教するだけではないと思う。なぜなら、僧侶は悲しみや不安などをもっている人々に寄り添い、救うことができるからだ。

日頃から仏教に触れていく中で、僕は自分だけの幸せを願うのではなく、苦しんでいる人々の支えとなれるよう、修行していくことが大切だということを学んできた。そこで学生として「わたしたちのくらしと生命保険」というテーマについて深く考える中で、ある仏教に通じる点があると考えた。

生命保険とは、人が病気になったり、亡くなったりしたときに、遺された家族や本人の生活を経済的に支える仕組みだ。仏教では、人間が避けて通れない四つの根本的な苦しみとして〝生老病死〟を説く。僕たちは生きている限り、いつ病気になり、いつ大切な家族との別れを迎えるか分からない。生命保険はまさにこの病や死という人生の大きな苦難が訪れたとき、現在の暮らしを今までどおりやっていけるように守ってくれる、という社会の盾のような存在なんだと思った。

さらに感動したのは、生命保険がもつ「相互扶助」という仕組みだ。これは、多くの人々が少しずつお金を出し合い、万が一のときに誰かをみんなで助けるというシステムである。この〝一人はみんなのために、みんなは一人のために〟という精神は、僕が日頃から目指している〝人のために行動する〟という心そのものではないかと思った。自分のことばかり優先しがちなこの現代社会において、見知らぬ誰かと見知らぬ誰かがお金という手段を通じて支え合っている。この生命保険の仕組みは、仏教で説く慈悲の心に通じる部分があると感じた。

僧侶は正法によって人々の〝心の苦しみ〟に寄り添う。一方で生命保険は経済的保障によって人々の〝現在の暮らし〟を支え寄り添う。その在り方は違っても、人が生老病死の苦難を乗り越えて安心して暮らすためには、やはり寄り添うことが必要不可欠だと思った。

修行はまだまだ続く。先ほど述べたような僧侶になるためには、多くの人々の助けや支えが必要だと思う。だからこそ一秒一秒を無駄にせず〝人のために行動する〟ことができる僧侶になれるよう、日々精進していきたい。